

令和6年度 有年中学校区小中連携教育 活動記録

1 令和6年度 小中連携教育研究部会具体的実践

- 小・中学校相互の授業研究を通して、子どもたちの実態の相互理解につとめる。
- 算数と数学の内容の系統性を把握し、指導の継続性を求めて、指導の改善を図ることにより、小・中学校9年間を見通した指導の相互理解につとめる。

2 有年中学校区の活動報告

(1) 有年中学校

○実施日：令和6年9月10日（火） ○単 元：1年数学科「一次方程式」

○実施方法：中学生の授業を小6の児童が見学

○事後協議

- ・基礎の定着が難しく、前の段階でのつまづきが大きいと感じている。
- ・学習の段階設定をすることでより学びの意味を感じられるようにしている。
- ・小学校での既習内容が使われていることを知り、これから学ぶことを見据えることができた。
- ・子どもたちが中学校の学習に対してより具体的なイメージを持つことができた。
- ・「はかせ」の考え方と同様の中学校での指導の様子を見られてよかった。
- ・中学の学習内容を先取りし学んでいることの確認をすることができた。
- ・単線型と複線型の学習で、単線型になりがちな学習を複線型に仕向けることで学習内容は高まるが、授業進度との兼ね合いが難しい。



※注釈：「はかせ」・・・「一番速い（は）やい）のはどれか？」

「一番簡単（か）んたん）なのはどれか？」

「結果が正確（せ）いかく）なのはどれか？」

(2) 有年小学校

○実施日：令和6年11月12日（火） ○単 元：6年算数科「縮図の利用」

○事後協議

- ・自分たちで話をして取り組む方法で授業を行っている。
→最後まで行き着かないこともある。
- ・以前にならったことからつながる様子に児童の意見をひろう。
- ・考えることが大事。
- ・班隊形で班員の考えも取り入れながらヒントをきける形になっていて苦手な児童も取り組める。

- ・例題の適応題で終わっても十分だった思う。
- ・児童たちが自分の言葉でしゃべれていてよかった。
- ・班で話す時間だけでなく、自分で考える力を養う為にも個別に考える時間があったりもよいかも。
- ・発言をしても大丈夫という空気が作れているから発言がよくできていてよかった。
- ・小中ともにノートを書くことで自分の思いをかき振り返ることが大切。
- ・計算スピード、考える力を養うこともともに大切。
- ・問題に最後まで取り組める姿勢作りが大切。



(3) 原小学校

○実施日：令和6年11月13日（水） ○単 元：6年算数科「比例と反比例」

○事後協議

- ・学力に大きな幅がないクラス
- ・児童の解き方の説明をみられるようこの単元に設定
- ・授業の後半に課題としてミライシードによる学習を導入
- ・式、表、グラフから自分にあった解き方を見つけるような授業方法もよいのでは。
- ・比例かどうかを見つける目的が、比例の式ありきで解かれてはいけない。
- ・適応題があってもよかったのではないかな。
- ・問題数を多く解けているのはよかった。
- ・生徒の発言を掘り下げていくことでより授業が深まる
- ・問題の数（量）と思考させる時間との割合が難しい
- ・算数、数学においては紙に書くということも重要である。



3 まとめ

昨年も課題となった「算数科・数学科のように、基礎学力と系統的な学習内容の積み重ねが必要とされる学習においては、小中学校相互の学習内容のつながりと指導方法の連携・深化・拡充が不可欠である。」という点において、小学生自身が見学する形をとることで、今現在の学びが来年以降の学びに繋がっていることの確認ができた。また、1年後の自分の姿をイメージすることができ、今後の学習への意欲に繋げることができた。